

『 源氏・平家の誕生と 源平合戦 』

はじめに

今年の大河ドラマは『鎌倉殿の13人』です。北条義時が主人公ですが、ドラマとはいえ、義時が好人物に描かれているし、史実と相違した箇所が何度も出てきます。所詮、北条氏は元を質せば、平家なのです。故に源氏は三代で滅亡し、源氏一族は根絶やしにしたと考えています。

今回は源氏・平家の発祥、源平合戦について発表させていただきます。

1. 源氏・平家の誕生

(1) 臣籍降下と源姓の始まり

平安遷都から20年経った弘仁5年(814)5月、後世からみると極めて重大なことが、朝廷で行われた。

第52代嵯峨天皇が4人の皇子と4人の皇女を皇籍から離脱させ、臣籍降下させて、源氏を名乗らせたのであった。

源氏の誕生である。

ちなみに嵯峨天皇にはなんと、50人の御子があり、引き続いて多くの御子達が源氏として臣

籍降下していき、総計では皇子17人、皇女15人併せて32人が源氏として降下したのだ。



第52代嵯峨天皇

これまでは天皇から数代後の臣籍降下をしており、大宝律令では、皇子を1代目とし5代目までは皇族であった。

左記は源氏を臣籍降下した21代の天皇である。

源氏の名前が出現する以前では皇子つまり一代目として、6代目から臣籍降下し、賜与された姓名

- 正親町源氏
- 後深草源氏
- 後三条源氏
- 村上源氏
- 陽成源氏
- 嵯峨源氏
- 仁明源氏
- 光孝源氏
- 冷泉源氏
- 後白河源氏
- 龜山源氏
- 文徳源氏
- 宇多源氏
- 花山源氏
- 順徳源氏
- 後二条源氏
- 清和源氏
- 醍醐源氏
- 三条源氏
- 後嵯峨源氏
- 後醍醐源氏

には下記のものがある。

「藤原」「橘」「在原」「^{すのぼろ}春原」「伏原」「長谷」「広根」「大江」「^{うづ}削」「^{よす}夜須」「長岡」「岡」などがある。しかし「源」姓が初めて賜与されたのである。

何故、嵯峨天皇が一举に32人のもの御子たちを臣籍降下させたのは、何故だったのか、根本的な理由は律令制度の衰退である。荘園という私領が増大し、天皇家が支配する公領が減少したのである（班田収授法の衰退…土地国有の原則で、国民一人当たり一定額の田を貸与して耕作させ、死後収公する法が衰退）。

また、大仏・国分寺・国分尼寺などの造営が原因で、嵯峨天皇の実父・桓武天皇が放漫財政を展開した。長岡京の造営と遷都、続けて平安京の造営と遷都や数度にわたる蝦夷征伐がとにかく費用がかかったのが原因である。

後三条天皇の代に院政への傾向が現れ、以後、白河・鳥羽・後白河と院政が行われた。すると途端に臣籍降下が解消されたのである。それまで財政逼迫が解消されたのである。

それまで減少しつつあった公領に財政基盤を置いていた天皇家が、増大しつつあった荘園にその基盤を移したのである。

（嵯峨天皇が即位した809年、朝廷内部の紛争『葉子の変』が勃発したが、時間の関係上、割愛いたします）。

(2) 清和源氏か？陽成源氏か？

源氏といえば、清和源氏といわれ、鎌倉幕府を開いた源頼朝も勿論、清和源氏と通常伝わってきた。

但し、清和源氏は、清和天皇の孫の経基王から始まるとされてきたが、明治33年(1900)、明治史学会の星野恒^{ひさし}博士が、「経基王が死去した天徳5年11月4日という日は、その年2月16日に改元され、実際に存在しない」との爆弾発言をされた。

というのも、永いこと清和源氏と信じられてきた清和源氏は、実は陽成源氏が正当であるとの論文を発表されたのである。

陽成天皇は宮中で乳兄弟を毆殺するなど、多分に狂気の性格で、「悪君の極み」とか「乱国の王」と呼ばれる、暴虐な天皇であったのである。

経基王が清和源氏のキーマンであるが、いわゆる清和源氏は陽成源氏だったことを認めている。しかし、中世史の泰斗、奥富敬之元日本医科大学教授は「永年の間、清和源氏と呼んでおり、世上でも定着しているのであるから、その実は陽成源氏であることを念頭に起きつつ、一応清和源氏と呼んでおく事としたい」と述べている

(3) 平家の氏姓は四流のみ

平家(平の姓を名乗る一族、平氏と同意語)は、第50代桓武天皇・第54代仁明天皇・第55代文徳天皇・第58代光孝天皇の4代の天皇から平の姓の臣籍降下があった。

桓武平氏は平清盛を武士としてその名を後世に残したので有名であるが、「平」姓賜与

は平安遷都から来る興奮があった一時期だけで、いわば一過性の変則だったことになる。

平の名の由来については、寛仁元年（1017）の『続群書類従』に、「朝敵をたいらぐる故」とあるが、天慶2年（935）に平将門・平貞盛が戦っているの、「平」の姓賜与は、これ以前でなければならない。

昭和に入ってから『姓氏家系大辞典』で、「其の名称は平安京の本訓タヒラより起こる。桓武帝、此の都を建てられしにより、其の子孫、此の氏を賜ひしならん」とあり、これが平氏の名前の由来なのか。

それと、桓武天皇は父が光仁天皇で、母は高野新笠であり渡来系（百済系）であり、桓武天皇の時代には、坂上田村麻呂が蝦夷（えみし）討伐の征夷大將軍として、後世に名を残している。

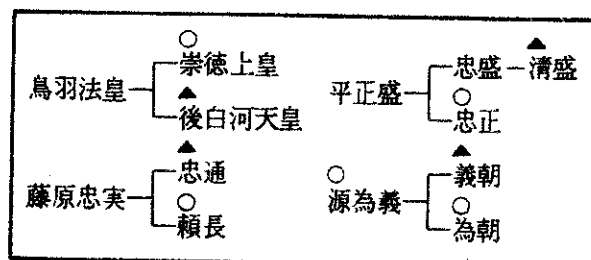
2. 源平合戦はいつ始まったのか。

(1)「保元の乱」(平安時代末期) 武士の登場

保元元年（1156）七月二日、長く権勢を極めた鳥羽法皇（法皇とは、仏門に入った上皇のこと）が崩御した。

当時、天皇家と摂関家が分裂し互いに対立していた。

ときの今上天皇は、後白河天皇（鳥羽法皇の第四皇子）であったが、別に崇徳上皇が健在であった。崇徳上皇は鳥羽法皇の長男であったが、法皇とは不仲の状態であり、法皇は、崇徳の弟の近衛天皇を無理やり譲位させながら、崇徳が院政を開く道を王権から排除してきていた。鳥羽院は近衛天皇が早逝すると、崇徳の皇子を排し、後白河を皇位に就けたのである。



〔保元の乱対立関係図〕(○は上皇方, ▲は天皇方)

摂関家でも、藤原頼長と少納言入道

こと藤原信西との対立が起きていた。

鳥羽院が没したばかりの時であったが、鳥羽御殿周辺と京洛一帯が、にわかには緊迫し、頼長は崇徳上皇を白川御殿に移し、軍兵をととのえ、集まったのが源為義とその子の頼賢・為朝、平忠正、源頼憲などである。

一方、天皇方は、三条西洞院大路にある内裏高松殿に集結していた。源氏は源義朝、同義康、同惟政ら、平氏は平清盛、同信兼、同惟繁らである。天皇方は信西の発案で夜討ちを謀り、圧倒的に優勢であったが、上皇方で唯一気を吐いたのが、為朝である。

為朝は一本の矢で平氏方の伊藤六、伊藤七兄弟を射落とすほどであった。

同じ源氏の一門同士の合戦であったが、都での本格的合戦は4時間ほどで、後白河天皇側の勝利し、義朝を頼って投降した為義親子はことごとく斬られたのである。

獅子奮迅の活躍した為朝も捕縛され、罪一等を減じられ、伊豆大島に流罪となった。歴史上、武家の時代が始まろうとしていた…。

(2) 「平治の乱」 源氏VS平家の対立

「保元の乱」のわずか2年後、後白河天皇は親政をやめて、二条天皇に譲位し、上皇となり院政を再開した。保元の乱後、ひとり権勢を握ったのは、信西入道である。摂関家の力を削ぐことに力を注いだ。信西は保元の乱の立役者の源義朝を冷遇した。義朝が摂関家の家人であったからである。義朝は佐馬頭に任ぜられて昇殿を許されものの、父為義や弟たちの助命嘆願は無視された。信西は平清盛を播磨守に任じるなど義朝より厚遇した。

平治元年(1159)12月4日、信西の同盟者である平清盛が一族揃って、熊野詣に出掛けた。9日夜半、この機を逃さず藤原信頼のクーデターが実行に移された。

清盛は熊野詣の途中、京都の政変を知って、急遽帰京したのである。

源義朝の軍勢は院御所の三条烏丸殿に押しかけ、後白河上皇を内裏に幽閉しようとした。しかし信西を捕縛しようとしたが、信西は間一髪事前に察知し、御所を脱出していたのであるが、宇治田原の山中で義朝軍によって成敗された。『平治物語』では平氏軍は三千余騎で、源氏軍は二百余騎としているが、いずれにしても源氏軍は劣勢であったことは確かであろう。軍勢が劣勢のなか、源義朝の長男・義平「悪源太」とも流布されていた。が叔父の源義賢(長男が木曾義仲)を討っている。義平はその弟の朝長と共に平治の乱で討ち死にした。

平治の乱が終わると、いよいよ平家の世が訪れようとしていた……………。

3. 源平合戦の主役はだれか

前項の平治の乱以降の源氏・平家の争乱の後には、一の谷の戦い・屋島の戦い・壇ノ浦の戦いで、源氏は勝利したことは、どなたも周知しておられると思いますが、平安時代後から始まった、この源平合戦の主役は誰なのかを検証したい。

(1) 後白河法皇は「日本一の大天狗」か、「無類の暗王」か

保元の乱で、後白河院は平清盛を引き立てており、清盛の妻の妹・滋子を、後白河院に嫁がせ、第80代高倉天皇が誕生する。

そして清盛の娘・徳子を高倉天皇と結婚させ、第81代安徳天皇が誕生したのである。



後白河法皇

前記の保元の乱での立役者の信西入道は後白河天皇のことを、「和漢に類ない暗王である」といい、鎌倉幕府の総帥・源頼朝は「日本一の大天狗」と評した。

天皇は親王時代、皇位と縁の遠い存在で、貴賤上下の人々と一緒に今様な朗詠など声楽に熱中し、下積み生活と衆人との交わりは親王に時を待つ耐久力と、巧みな人扱いの術を身につけさせたのであろう。

久寿2年（1155）、近衛天皇が後嗣が定まらぬままに崩御したため、凶らずも皇位に就いた天皇は、すでに29歳に達していた。ただし、翌年前記の保元の乱が勃発したが、この難局を信西入道のお蔭で乗り切ることができたのである。

しかし、保元3年8月、天皇は僅か3年で二条天皇に譲位し上皇となった。翌年、平治の乱では源義朝の軍勢に御所を焼き打ちされ、押し込められたが、ひそかに、仁和寺に逃れて危機をまぬがれた。

平治の乱は平清盛によって鎮定され、上皇と清盛の間は一応の安定を保ったが、やがて両者の間は反平家勢力の抬頭に伴い、険悪となり、ついに治承3年（1179）には、清盛のクーデターにより、上皇は幽閉されたのである。

しかし、この事件は反平家運動を燃え上がらせて、養和元年（1181）清盛が病没するや、急転直下、平家は滅亡の道を歩み、寿永2年（1182）には、木曾義仲の軍勢により都から追い落とされた。

ところが、新しく都の主人公になった義仲は、間もなく源頼朝対立して形勢不利となり、上皇を法住寺殿に襲ったが、翌年正月、源義経・範頼らの軍勢と戦い敗死した。

ついで、文治元年（1185）、平家が壇ノ浦にて滅び、ようやく内乱が収まったかに見えたが。頼朝・義経の不和から、窮地に立たされた上皇は義経に強要されて頼朝追悼の命を下したのである。しかし、間もなく義経は都を落ちのび、上皇は義経追悼の院宣を下して、なんとか難局を切り抜けた。ようやく平安な日が訪れていたが、建久3年（1192）3月、66歳でこの世を去ったのである。

上皇を無類の暗王と酷評していた信西は「やろうと思ったことは、貫徹する」と言い、「一度聞いた事は決して忘れない」とも言っている。強引に遂行するのでなくいつも受け身で忍耐強く局面をくぐり抜けながら、初志貫徹するしぶとさが特色である。上皇はこの内乱期に、積極的に手を打ったものは何もない。沈んでは浮かんでくる権力者の超然とした姿を、源頼朝の眼には「日本一の大天狗」と映ったのかも知れない。

（2）源平合戦のヒーロー達の末路

木曾義仲や源義経については、過去研究発表や会報に投稿していますので、詳細なことについては割愛します。

① 木曾義仲

義仲の実父は源義賢である。久寿2年（1155）、義賢の甥にあたる源義平（後に悪源太の異名を流布された。頼朝の兄）に武蔵国大蔵の館で撃ち殺されたのである。義仲が僅か2歳の幼児であった。母と共に信濃国の木曾谷の豪族中原兼遠に身を寄せた。以来20余年の時が経ていった。

治承4年（1180）4月、木曾谷の義仲のもとに、以仁王の令旨が、叔父の行家によってもたらせた。平清盛を追討せよという内容であった。

以仁王の令旨は、この年8月源頼朝が挙兵。次いで9月7日に義仲も兵を挙げた。

寿永元年（1182）は全国的に凶作で源平双方は兵を動かすことなく、休戦状態であった。その間、義仲と頼朝の間に不和が生じていた。甲斐源氏の武田信光が頼朝に、義仲に平家と結ぶ動きがあると讒言したことや、頼朝と仲違いした源行家や志太義広を義仲がかくまったこと等が理由であった。

そこで、義仲は頼朝に和議を申し入れた。講和の条件は義仲の長男・義高11歳を、頼朝の長女大姫と結婚させる約束で、鎌倉の頼朝のもとに人質として送ることで同意したのである。

以後、倶利伽羅峠の戦いで大勝し、次々と平家軍を撃破したのである。そして、都に凱旋入国し、無官の立場から後白河法皇より、従五位下佐馬頭兼越後守に上り、伊予守に転じることとなる。

だが、8月になり、義仲は以仁王の遺子・北陸宮を皇位に就けるべく、法皇に強要したことから、法皇と義仲の間は決裂していった。

義仲は法皇に強要して頼朝追討の宣旨をうけ、公然と頼朝に対抗する立場をあらわにした。翌寿永3年（1184）正月十日、義仲はついに征夷大将軍に任ぜられ「旭將軍」となったのである。

後世、木曾義仲の悪評の基となったのは、法皇の居所・法住寺に攻め込んだ「法住寺合戦」であるが、九条兼実が『玉葉』の中で、「義仲は不徳の君を誡める天の使いなり」と記している。

これについては、近代の文豪・芥川龍之介の論文『義仲論』の中で、同様のことを述べている。

しかし、その後、元暦元年（1184）正月20日、木曾義仲は源範頼、義経の軍勢によって討ち取られた。

義仲の僅か敗死後3カ月後の4月26日、嫡男義高は入間河原（現埼玉県入間市）にて、北条氏家臣堀藤次親家によって誅された。僅か12歳の儂い人生を終えたのである。

祖父義賢、父義仲、義高の三代は源氏一族内の骨肉の争いにて消えさったなお、木曾義仲の史話には巴午前が必ず登場する。『平家物語』や『源平盛衰記』

には記述があるが、『吾妻鏡』は一切記載なく、地元の本曾義仲史学会の会長からも、実在の人物であったかも定かではないとお聞きしている。

② 源義経

源義経は誰もが知っている悲劇の英雄ですが、兄源頼朝との間は決裂し行方がつかめぬ段階で、文治2年（1186）4月、義経の愛妾・静御前を捕らえて、鎌倉に押込めていた。同8日、鶴岡八幡宮の回廊に召しだされ、頼朝と政子が歌と舞を所望し、静御前は下記の歌と舞を披露した

「よし野山 みねのしら雪 ふみ分けて
いりひ人のあとぞこひしき」
「しづやしづしづのをだまきくり返し
昔を今になすよしもがな」

この歌と舞に、頼朝は八幡宮の門前で関東の万歳を祝うべき処、反逆の義経を慕うのはけしからんと言うと、政子は自分達も親の時政の反対を押し切って、結婚したのでありと、論したと『吾妻鏡』に記載があります。

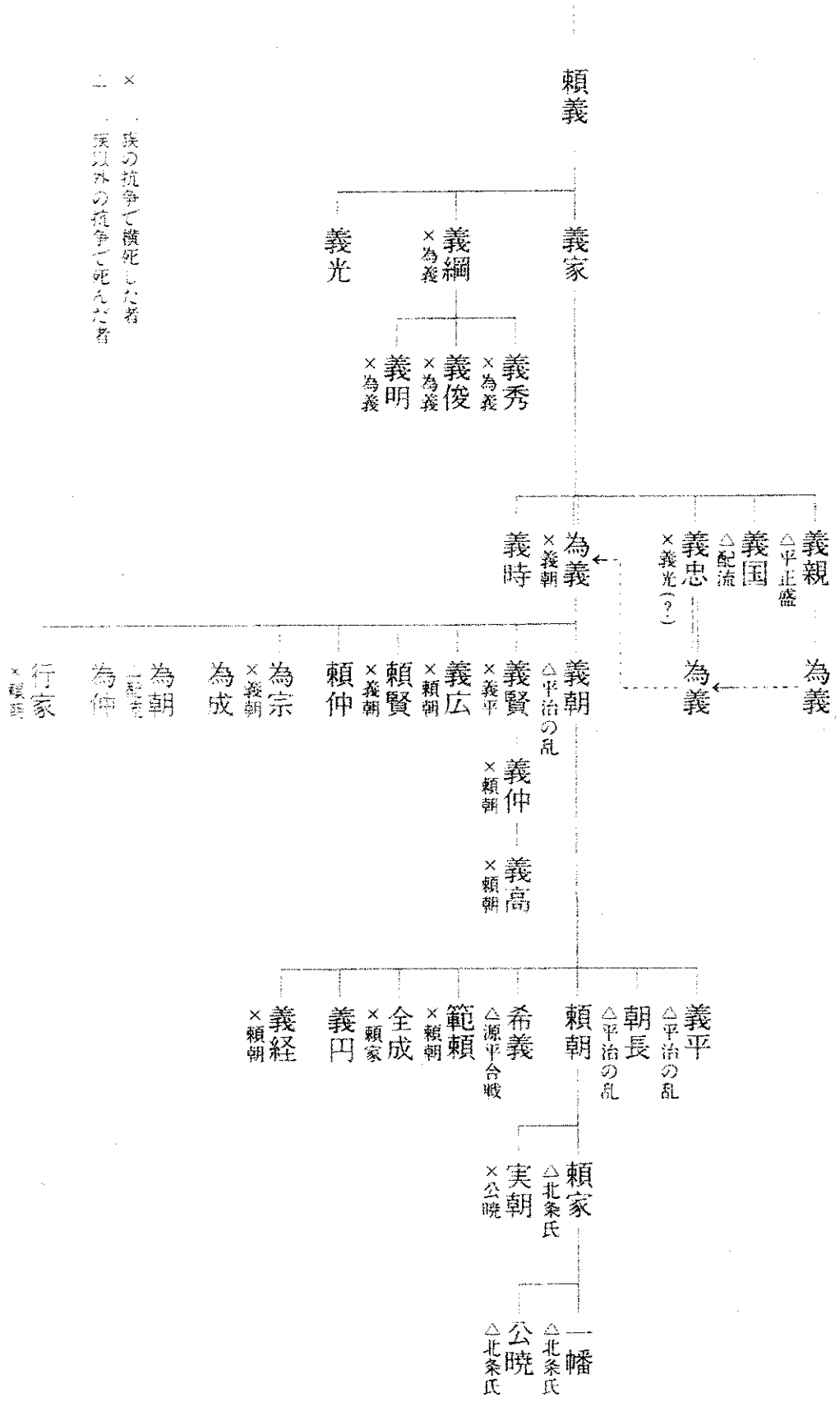
ただし、同年閏7月29日、静御前は男子を出産したが、将来の反逆を恐れ、頼朝は家臣の安達新三郎に命じて由比ガ浜にて、この赤子を棄ててしまったのである。

なんとも源氏一族の内訌の恐ろしさを痛感します。

[参考文献]

「全譯吾妻鏡」	貴志正造	新人物往来社
「鎌倉武士物語」	今野信雄	河出書房新社
「天皇」	児玉幸多	東京堂出版
「甦る比企一族」	清水 清	比企一族頭彰会
「源氏一族のすべて」	奥富敬之	新人物往来社
「陰謀の日本中世史」	呉座勇一	角川書店
「鎌倉興亡史・比企一族の乱」	加藤 蕙	秋田書店
「保暦間記」	佐伯真一	和泉書院
「鎌倉事典」	白井栄二	東京堂出版
「鎌倉・室町人名事典」	安田元久	新人物往来社
「裏方将軍 北条時政」	小野眞一	叢文社
「源平の興亡」		学習研究社
「ウイキペディア」		画像のみ

源氏嫡流相剋図



× 疾の抗争で横死した者
△ 疾以外の抗争で死んだ者

『鎌倉武士物語』より転載